

ニカメイチユウに対するセレン酸

ソーダの防除効果について

望 月 正 己

葉鞘変色茎の出現期にあたる8月27日に、野外より葉鞘変色茎を採集し、別にイネ品種銀中を1本植としておいたボット（内径16cm、深さ20cm）中に6本づつ挿入し、それにセレンサンソーダを0.01gr乃至0.1grの濃度範囲で撒布した。撒布

は8月27日と30日の2回に行い、その後、被害茎率、死亡率、幼虫の体重等を調査したところ第1表のような結果を得た。次に8月30日に0.05~0.1%を撒布して被害茎率を調査したのによると第2表の通りである。

第1表 セレンサンソーダによる影響調査

試験區	1株本數	無被害茎	被害茎率	生 虫	死 虫	死亡率	平均1頭量
無處理區	15	1	93.4	9	0	0	1.07mm
0.01%區	16	12	25.0	6	0	0	0.76
0.05%區	—	—	—	8	7	46	0.69
0.10%區	18	15	17.0	4	32	88	0.65

第2表 セレンサンソーダ撒布による被害茎率（9月15日現在）

試験區	総 茎 数	被害 茎 数	被害 茎 率	備 考
無處理區	18	9	50.0	8月30日に撒布
0.005%區	26	9	34.7	〃
0.01%區	32	7	21.7	〃
0.05%區	24	4	16.7	〃
0.1 %區	20	2	1.0	〃
0.1 %區	26	3	11.3	撒布後2日目に放飼
0.1 %區	23	5	21.7	〃 15 〃

上記各表で明らかのように、セレンサンソーダは葉鞘変色茎の出現時期に用いれば、ニカメイチユウ防除に効果を發揮することがわかる。即ち、1ボット0.1gr程度であれば殆んど完全にその発育を止えることができ被害も軽度にすむようである。本剤の効果は若令幼虫に対しては特にいちぢるしい。

(富山農試 昭27)

イネカラバエの新寄主ムギ類について

杉 山 章 平・飯 嶋 尚 道

著者等は昭和26年4月に、新潟県中頸城郡三郷村に於てオオムギの葉が裂孔痕をつけた傷葉とな

つてゐるのを発見し、調査の結果、加害虫は双翅目の幼虫であつたので注目していたところ、その

後に於て本虫はイネカラバエ *Chlorops oryzae* MATSUMURA であることが判明した。本種とムギとの関係場面については、昭和24年10月に岡本大二郎氏が島根縣赤名に於てコムギに対する産卵を観察されている外は記録を見ないようである。著者等の発見時期4月に傷葉を見るることは、當然、オオムギが越冬寄主であつたことを示すものであつて、岡本氏も越冬寄主としてのムギ類に

ついては発表されていないので、この点を明らかにしようし、5月1日高田市附近のムギ畑に於て調査を行つたところ、オオムギのほかコムギ及びライムギにも傷葉の発生しているのを発見できた。よつて、畦6尺間を4回反覆調査しその平均値を求めたところ、第1表に示すような結果を得られた。

第1表 オオムギ及びコムギに於ける傷葉茎の発生調査

圃場記号	調査地	ムギの種類	茎数	傷葉茎数	傷葉率(%)	最高草丈(cm)
A	三郷村	オオムギ	106.0	20.6	19.4	47.1
B	〃	〃	151.2	12.2	8.0	42.5
C	〃	〃	290.7	7.5	2.6	51.1
D	〃	〃	216.2	5.2	2.4	53.6
E	津有村	コムギ	171.2	1.7	1.1	47.1

これらのムギ類には傷穂を発生させるものがあることもわかつた。イネカラバエの越冬寄主として當地方では、すでに、スズメノテツボウ、スズメノカタビラが知られていたが、今回の調査によつて、上記に、さらに、オオムギ、コムギ及びライムギを追加することができる。

(北陸農試 昭27)

イネカラバエに対するパラチオン

乳剤の効果

高木信一・小林幹男

1952年新潟農試の發生予察圃場に於てイネカラバエによる被害を防止する目的を以てパラチオン乳剤の撒布試験を実施した。供試品種は水稻農林21号で、本品種は8月8日に出穗期に達した。供試薬剤はホリドールE-605 (46.6%) の1000倍液及び2000倍液である。撒布時期は7月15日、7月24日、8月5~7日である。この試験結果から大体次の諸項が要約できようかと思う。

1. 1000倍液と2000倍液との間には効果の差異が認められない。

2. 7月24日の撒布は有効であつたが、この時期は、圃場掏取りによると幼虫は若令で、食入も極めて浅かつたことが主因だつたかと思はれる。

3. 7月15日撒布は有効とは言い得なかつた

が、この時期は大部分の卵が孵化前であつた為であろうと思はれる。このことからみても本剤の殺卵力は期待できない。

4. 8月5~7日の撒布も被害を低減させることはできない。この時期は出穗直前であつて、薬剤と虫体との接触は充分であつて殺虫率の点ではかなり有効であろうと思われるが、効果の判定が単位面積當りの傷穂数によつたためであつて、この時期に殺虫が行われても傷穂数の多少とは無関係だつたからであろう。

(新潟農試 昭28)